

事業区分	経常研究(応用)	研究期間	平成 28 年度～平成 31 年度	評価区分	事前評価
研究テーマ名 (副題)	長崎和牛ブランド強化のためのさらなる高品質肥育技術の開発 (簡易血中ビタミンA濃度測定装置の開発とビタミンA制御に依存しすぎない肥育技術確立)				
主管の機関・科(研究室)名	研究代表者名	農林技術開発センター畜産研究部門大家畜研究室 早田剛			

### <県長期構想等での位置づけ>

長崎県長期総合計画	第 5 章 施策の方向性 I 農林業を継承できる経営体の増大 I- 2 業として成り立つ所得の確保
新科学技術振興ビジョン	第 3 章 長崎県の科学技術振興の基本的な考え方と推進方策 2-1 産業の基盤を支える施策 (1) 力強く豊かな農林水産業を育てるための、農林水産物の安定生産と付加価値向上
ながさき農林業・農山村活性化計画	4. 肉用牛振興に関する 5 年間の基本目標 (1) 肉用牛の飼養頭数 (2) 肉用牛の産出額

### 1 研究の概要(100 文字)

生産現場で利用可能なリアルタイムかつ簡易な血中ビタミン A 濃度測定装置の開発および肝機能に着目したビタミン A 制御に頼り過ぎない新たな高品質牛肉生産技術の開発を行う。

研究項目	① 簡易血中ビタミン A 測定手法の開発 ② 安定した高品質牛肉生産技術の開発
------	--

### 2 研究の必要性

#### 1) 社会的・経済的背景及びニーズ

黒毛和種肥育生産において、約 20 ヶ月の肥育期間中に脂肪交雑を高める目的で肥育牛の血中ビタミン A 濃度を適正に制御するビタミン A コントロール技術は全国の生産現場において一般的に行われている。

一方、肥育牛の血中ビタミン A 濃度の測定は、高速液体クロマトグラフィーによって分析することが公定法とされている。しかし、この手法では、肥育牛から採血したサンプルを実験室に持ち帰り、前処理から分析結果の判明までに時間を要するため、生産現場における肥育牛のビタミン A 制御は生産者の経験や肥育牛の外観、活力をもとに主観的に行われている。加えて、ビタミン A の代謝や蓄積は個体差が大きく、リアルタイムでの血中ビタミン A 濃度の把握が困難であるため、過剰なビタミン A 制御による肝機能の低下や増体性の低下、瑕疵の発生などが課題となっており、生産現場で活用可能なリアルタイムかつ簡易な血中ビタミン A 濃度測定手法の確立が強く望まれている。さらに、ビタミン A 制御による弊害として肝機能が低下し、内臓廃棄の増加や増体性の低下などの問題が発生しており、肥育牛の負担を軽減しつつ安定的に高品質な牛肉を生産できる肥育技術の開発も望まれている。

そこで、生産現場で活用可能な簡易血中ビタミン A 濃度測定装置の開発とビタミン A 制御と肝機能強化の相互作用を明らかにし、より安定した高品質牛肉生産技術の開発を目指す。

#### 2) 国、他県、市町、民間での実施の状況または実施の可能性

H27FS 研究において(独)産業技術総合研究所九州センターと共同で手法の絞り込みを進め、装置の開発につなげたい。

また、肝機能の強化とビタミン A 制御レベルの関係についての報告はなく、肝機能の強化については当部門における予備試験で内臓廃棄が減少することを確認している。

### 3 効率性(研究項目と内容・方法)

研究項目	研究内容・方法	活動指標	H					単位
			28	29	30	31	32	
①	新たな血中ビタミン A 測定手法と従来法の関係把握	関係解析頭数	目標	50	50	50	50	頭(延べ)
			実績					
②	肝機能の強化と最適なビタミン A 制御レベルの把握	肥育牛頭数	目標	8	8	12		頭
			実績					

1) 参加研究機関等の役割分担

・(独) 産業技術総合研究所九州センター：研究項目①

2) 予算

研究予算 (千円)	計 (千円)	人件費 (円)	研究費 (千円)	財源			
				国庫	県債	その他	一財
全体予算	100,380	36,948	63,432			60,336	3,096
28年度	25,095	9,237	15,858			15,084	774
29年度	25,095	9,237	15,858			15,084	774
30年度	25,095	9,237	15,858			15,084	774
31年度	25,095	9,237	15,858			15,084	774

※ 過去の年度は実績、当該年度は現計予算、次年度以降は案  
 ※ 人件費は職員人件費の見積額

(研究開発の途中で見直した事項)

4 有効性

研究項目	成果指標	目標	実績	H28	H29	H30	H31	得られる成果の補足説明等
①	生産現場で利用可能な新たな血中ビタミンA濃度測定手法の開発	1					○	50IU/dl 以下が測定可能かつ1検体あたり15分以内で測定可能な装置を開発する
②	ビタミンA制御に依存しすぎない肥育技術マニュアル	1式					○	肝機能の強化とビタミンA制御レベルを考慮した肥育管理技術を開発する

1) 従来技術・先行技術と比較した新規性、優位性

血中ビタミンA濃度の推定手法は分光光度計を用いた方法などが開発されているが、肥育牛で特に問題となる50IU/dl以下の濃度での測定精度が低下することなどの課題がある。本研究で検討する新たな手法は畜産分野ではほとんど活用されておらず、その報告もない。27年度に手法の評価、絞込みについて先行してFS研究に取り組んでいる。

当部門において、先行して予備試験を行い肥育期間中に肝機能を強化することで内臓廃棄が減少することを確認しているが、産肉性との関係は明らかではない。また、肝機能減退症の治療薬として用いられるウルソデオキシコール酸を飼料に添加することで脂肪交雑が向上したとの報告があるが、その最適な添加割合、添加時期およびビタミンA制御との関係についての報告はない。

本研究で取り組む、肝機能とビタミンA制御レベルとの交互作用を明らかにして安定的に高品質な牛肉を生産する技術は他県での取り組みはなく、本県独自の本技術を用いることで高品質牛肉の安定生産につながり長崎和牛のブランド強化に寄与できる。

2) 成果の普及

■研究成果の還元シナリオ

本研究で開発された手法(ビタミンA測定および肥育技術)を関係機関(県内診療獣医師、全農ミートフーズ、県内農業協同組合、振興局など)と協力し、農家への指導時に活用することで、実用化を図る。

■研究成果による社会・経済への波及効果の見込み

過度なビタミンA制御による肝機能の低下、それらの影響による増体性の低下が緩和され枝肉重量が増加する効果が期待できる。ビタミンA制御と肝機能低下の影響が大きく増体性の低下が著しい生後18ヵ月齢から28ヵ月齢の10ヵ月間(300日)の1日増体量が0.1kg向上すると仮定すると枝肉重量が20kg向上する。

(枝肉重量向上効果) × (H26平均枝肉単価) × (長崎県黒毛和種去勢肥育牛出荷頭数)

20kg × 1,946円 × 6,767頭 = **26,337万円**

(研究開発の途中で見直した事項)

種類	自己評価	研究評価委員会
事前	<p>(平成 27年度) 評価結果 (総合評価段階: A )</p> <p>・必要性 :A 黒毛和種肥育牛生産現場でのビタミン A 制御は、生産者の経験や牛の外貌、活力をもとに、主観的に行われており、過剰な制御による肝機能の低下など生産性を低下させる要因となっている。そのため、生産現場でリアルタイムかつ簡易に血中ビタミン A 濃度を把握する手法が求められている。また、肝機能の強化と組合せることで、肥育牛への負担を軽減しつつ安定的に高品質な牛肉生産ができる可能性があり、肉用牛農家の所得向上につながる。</p> <p>・効率性 :A 簡易な血中ビタミン A 濃度測定手法の確立は、平成 27 年度から FS 研究にも取組んでおり、(独)産業技術総合研究所九州センターとの共同研究体制も整っている。また、新たな高品質肥育技術の開発は、すでに予備試験により内臓廃棄が減少することを確認し、その効果の一端を把握しており、産肉性との関係を把握し、新たな肥育管理マニュアルの開発を行いたい。</p> <p>・有効性 :A 今回、開発に取り組む血中ビタミン A 濃度把握手法は畜産分野における活用の報告はなく、27 年度から先行して(独)産業技術総合研究所九州センターと共同で FS 研究に取り組んでいる。また、肝機能の強化とビタミン A 制御の関係についての他県での知見は少なく、新規性は高い。あわせて、本研究で開発された手法(ビタミン A 測定および肥育技術)を関係機関(県内診療獣医師、全農ミートフーズ、県内農業協同組合、振興局など)と協力し、農家への指導時に活用することで、実用化を図る体制が整っている。</p> <p>・総合評価 :A リアルタイムで血中ビタミン A 濃度を把握する手法および肥育牛の負担を軽減し、生産性を向上させる技術は肥育農家から強く求められており、新たな手法を用いて生産現場で利用可能な装置の開発と肝機能強化とビタミン A 制御との関係を把握し、新たな肥育管理マニュアルの開発を目的とする。また、本技術を用いて肥育牛の客観的なビタミン A 制御が可能となり、さらに肝機能の強化と組合せることで肥育牛への負担を軽減しながら安定的に高品質な牛肉生産を可能とし、「長崎和牛」ブランド強化に寄与できる。</p>	<p>(平成 27年度) 評価結果 (総合評価段階: A )</p> <p>・必要性 S 研究成果が高品質な牛肉生産につながり、農業所得向上に寄与すると考えられる。また平成24年に全国和牛能力共進会で、内閣総理大臣賞を受賞し、長崎和牛のブランド強化が急がれる中、タイムリーな課題と言える。</p> <p>・効率性 A 以前から脂肪交雑診断装置の開発を連携して行ってきた産総研との共同研究であり、機器開発の可能性が高いと考えられる。</p> <p>・有効性 A 研究成果を農協、普及組織、獣医師など関係機関と連携して農家へ普及、指導する体制が整備されているため、効果的に普及を図ることができると考えられる。一方開発した機械の導入コスト、採血の方法などが課題としてあげられる。</p> <p>・総合評価 A 生産現場で利用可能なビタミン A 濃度の分析装置の開発と新たな肥育牛管理マニュアルの作成は、「長崎和牛」ブランド強化に寄与する。一方脂肪交雑主眼の肉質改良は限界に近いと思われ、むしろ健康志向に合致した肉の生産や評価方法なども視野に入れておく必要がある。</p>
対応		対応: 血中ビタミンA濃度測定装置の開発では、機器

		<p>のコストおよび採血方法など生産者が導入しやすい条件も考慮しながら開発に取り組みたい。</p> <p>また、客観的なビタミンA制御と肥育牛の負担を軽減する飼養管理により、肉質の向上のみならず肉質の安定を図り、飼養管理と肉質の関係把握に努め、ニーズに応じた牛肉生産についても検討したい。</p>
途 中	<p>(平成 年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階: )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要性</li> <li>・効率性</li> <li>・有効性</li> <li>・総合評価</li> </ul>	<p>(平成 年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階: )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要性</li> <li>・効率性</li> <li>・有効性</li> <li>・総合評価</li> </ul>
	対応	対応
事 後	<p>(平成 年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階: )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要性</li> <li>・効率性</li> <li>・有効性</li> <li>・総合評価</li> </ul>	<p>(平成 年度)</p> <p>評価結果 (総合評価段階: )</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・必要性</li> <li>・効率性</li> <li>・有効性</li> <li>・総合評価</li> </ul>
	対応	対応